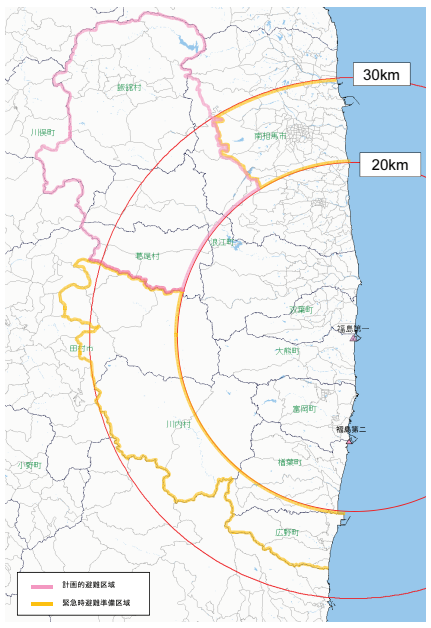
9月中にも指定解除へ

緊急時避難準備区域　川内村は3月帰還

福島第一原子力発電所事故により「緊急時避難準備区域」に指定された福島県内の五市町村のすべてが、同区域解除の前提となっている各市町村の「復旧計画」を二十日までに提出し、藤村修・官房長官も同日の記者会見で、九月中の指定解除を目指すとした。



同復旧計画を十三日に最初に提出した川内村は、福島第二原子力発電所が立地する富岡町の西に位置し、面積の約六五%が「緊急時避難準備区域」に指定されている。

同計画では、村内全地域を除染し住民の安全・安心が確認される時期を今年十二月として帰還宣言し、村民の帰還は来年二月から開始、三月までには避難住民約三千人の帰還完了を目指すことを表明した。

学校関係については、保育園や小中学校を来年四月から再開することとし、そのためにも除染計画を早急に作成、年末の除染完了を目指すこととした。地域住民の協力を得て効果的な除染を実施し、推定年間被ばく線量一ミリシーベルトを除染の目標と設定している。

村の中核となる役場の業務再開は、全村帰還の時期に合わせて来年三月中を目指す。

福島の放射線被ばくに提言

日本財団　モニタリング継続など重要

日本財団は十一日と十二日、福島市の福島県立医科大学で、国際専門家会議「放射線と健康リスク――世界の英知を結集して福島を考える」を開催した。

会議には、米国、ロシア、ウクライナ、ICRP、IAEAなど世界十四か国・二国際機関から三十一人の専門家と、国内の研究者や行政、メディア関係者など約四百人が参加した。

会議では、基調講演に続いて「福島の現状」「チェルノブイリ原発事故の教訓」など6つのセッションで議論が行われ、次の八項目の提言案がまとめられた。

①早期の避難により公衆の被ばく線量は低かったが、環境モニタリング継続が必要②全福島県民対象の健康調査は重要③日本は、広島・長崎の経験をもち、放射線への対応能力が高い④日本は最も高度な放射線の緊急時対応システムを有するが、複合災害によりシステムの一部が機能しなかった⑤専門家は福島などの住民に対して放射線の影響について科学的事実をわかりやすく説明する義務がある⑥医学面だけでなく、社会面、心理面の支援も必要⑦国際機関による支援と国際機関間の連携の強化が重要⑧日本政府と国際機関は今回の教訓を生かし、中長期的な連携を図るためタスクフォースを結成するとよい。

提言の全文は日本財団のホームページに掲載される。

休刊前に脱原発危惧

原子力eye　57年の歴史に幕

日刊工業出版プロダクション発行の月刊原子力専門誌「原子力eye」（中村悦二編集長）が十一月号（十月八日発売）をもって、休刊となる。

一九五五年（昭和三十年）三月に「原子力工業」として創刊以来、九八年の「原子力eye」への改名を経て、約五十七年の歴史に一旦区切りを付ける。「諸般の事情により今回休刊することを決定した」としている。

福島第一原子力発電所の事故の検証が、政府の専門委員会や原子力学会などで進められており、世界に与えた影響も、ほとんど関係なく推進路線を邁進する中国、インドなどがある一方で、ドイツ、スイス、イタリアは脱原発路線に舵を切った。米国での原子力発電所建設の雲行きも気になりつつ、一体、日本の原子力開発はどこに向かおうとしているのか、というこの先を見極める重要な時期の休刊となった。

内閣府のエネルギー・環境会議（国家戦略会議）、経産省の総合エネルギー調査会、原子力委員会の新大綱策定会議と同時並行的に議論が進められることになっており、民主党政権＋福島原子力事故の下では、いままでの先の見通しの「常識・価値観」は通用せず、温暖化ガス二五%削減目標と合わせて、野田首相が言う「幅広く国民各層の意見を聞きながら、冷静に検討して行く」との方針のみでは、国民だけでなく実際に原子力を担っている、またはこれから担いたいと考えている若者達に、計り知れない影響が出てくることは、想像にかたくない。

原子力eyeの十月号では、遠藤哲也氏（ウィーン国際機関日本政府代表部大使、原子力委員長代理などを歴任）が福島事故を受けて、「脱原発の下でのサイクルの行方」を論じており、脱原発は「国民生活、経済活動に取り返しのつかない打撃を与えることになりかねない」と警鐘を鳴らすだけでなく、「核燃料サイクルは原発システムの一環であり、核燃料サイクルの帰すうは、期間のずれはあるにせよ、原発が今後どうなるかにかかわっている」と、日米原子力協定の改訂問題にもからめて、今後百年の計とも言える燃料サイクルの行方についてたいへん大きな危惧の念を示している。

放射線教育用動画を公開

放医研

放射線医学総合研究所は二十日、同研究所の研修課程で実際に使用している「放射線教育用アニメーション」の一部を同研究所ホームページで一般公開した。今後コンテンツを追加していく。

東京電力福島第一原子力発電所事故により、放射線のことを知りたいというニーズが高まっていることを受けて、放射線についての正しい知識と測定法を習得してもらうことを目的としている。

米TMI関係者も日本にエール

JANUS

日本エヌ・ユー・エス（JANUS）社のホームページ（http://www.janus.co.jp/essays/postfukushima/index-j.html）に、「ポスト福島に向けて」と題して、福島第一原子力発電所の事故について、同社がいままで業務上関係してきた諸外国の専門家らのエッセイが掲載されている。

米コンサルタント会社のゲイル・マーカス氏は「福島後の原子力規制」について、日本の新規制体制への提言、米エクセロン社TMI原子力発電所のエドワード・フレデリック氏は「私の経験」として、TMI―2号機事故当時、制御室の運転員として、またその後の事故対応の困難さを紹介しながらも、「それでも問題を直視し、そこから学び、前進しなくてはなりません。必ず、良い方向に向かっています」と日本の関係者にエールを送っている。

福島事故と原子力の行方シンポ

原子力財団

日本原子力文化振興財団は十月二十一日、東京・有楽町の朝日ホールでシンポジウム「これからの原子力を考える――東京電力福島第一原子力発電所事故と原子力の行方」を開催する。無料・参加自由。

午後二時から四時半まで。パネル討論として、ジャーナリストの田原総一朗氏をコーディネーターに、石川迪夫・日本原子力技術協会最高顧問、豊田有恒氏（作家）、西尾幹二氏（評論家）、山名元・京都大学原子炉実験所教授、吉岡斉・九州大学副学長が議論する。申し込みは同財団ホームページなどから。

Salon

絵をとおして東北・福島を支援

鉄道風景画家・松本忠さん

繊細なタッチで描かれた鉄道駅舎と列車の走る風景の数々。これらの絵を通してふるさとへの郷愁を与えてくれるひとりの画家がいる。鉄道風景画家の松本忠さんだ。

松本さんは一九七三年生まれ、埼玉県の出身。仙台にひとり暮らして大学に通っていた頃、鈍行列車に揺られての旅を趣味とするようになった。大学一年の夏、「青春十八切符」を使って行けるところまでいってみようと、遠回りした埼玉県への初めての帰省旅が鉄道の魅力を教えてくれるきっかけになったという。旅の途中で目にした海べりのぽつんと佇む駅や小さな待合室、一両きりの車両――これらが松本さんの心を虜にした。今まで知っていた鉄道とは違う世界があった。

◇　◇

総合化学メーカーに就職後も、週末の時間を利用して鈍行列車の旅を趣味として楽しんでいたが、ローカル線の鈍行列車を眺めていると、忙しい日常とは違う「もうひとつの時」が流れていくと感じた。入社三年目、転勤先での一人暮らしが松本さんの思いを強くさせた。大好きな鉄道の絵を描いてみたい――。

それから二年後の二〇〇一年、勤めていた会社を退職後、福島県郡山市に移り住んだ。鉄道の要衝であるこの町を拠点とし、東北地方を中心に全国を旅して、鉄道を描き始めた。

松本さんは言う。「それぞれの魅力を持っていて比較はできないが、あえて言うならば、内陸部を走る路線としては福島県と新潟県を結ぶ只見線が好きだ。退職して郡山に移住し、最初に乗った路線だ。一歩ずつ、ひと駅ずつ、ゆっくりだけれど力強い歩みに励まされた。こんな風に、一歩ずつでいいから、とにかく描き続けていこう、という気持ちにしてくれた。東北地方の日本海沿いを走る五能線も自分にとって特別な路線といえる。大学一年の夏の帰省旅行。日本海に飲み込まれるような夕陽の美しさが忘れられない」。

◇　◇

三月十一日の大震災は、第二のふるさとである東北地方の鉄道を多く描いてきた松本さんにとっても衝撃だった。心に残る東北地方の鉄道風景をすっかり変わり果てた姿にしてしまった。そして原子力発電所の事故が起こった。

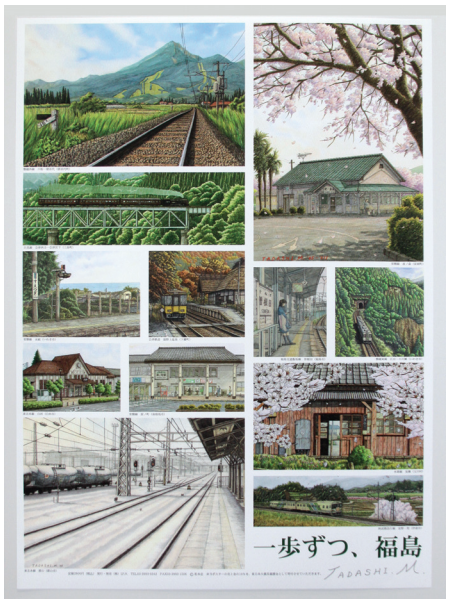
被災地そして避難している人々を目にしたとき、郡山で絵描きとしてのスタートをきった自分にできることは何かと考えた。自分の絵が役にたてないだろうか――。

今年五月には郡山での個展を例年通り開いた。東北地方、福島県の駅や路線の絵を集めたポスターを作製した。また、三月十一日以降の個展売り上げの一割を義捐金として寄付する活動を始めた。各地での個展開催を通じて、年内一杯、寄付を続けるつもりだ。

七月には原子力発電所事故の影響で埼玉県内に避難している双葉町の避難所を訪れ、ポスターと絵葉書を手渡し、励ました。これまで東北の地でお世話になったことへの感謝と今後の復興への祈りをこめて。

◇　◇

福島県富岡町夜ノ森地区は桜の名所として有名だが、そこを走る常磐線の夜ノ森駅の思い出を松本さんは語る。「結婚を機に郡山を離れ埼玉県に戻る前の春、親しくしてくれた郡山の仲間と桜を楽しんだ」。

原子力発電所事故に伴う警戒区域内にあるため、今は足を運ぶことはできないが、松本さんは夜ノ森駅の桜を再び目にする日が一日も早く来ることを願っている。

松本さんの心はこれからも、東北の鉄道風景と人々と共にある。